

凍土をみつめて

広島県 星野 豊

黒河へ

東の空がしらみかけたとき、私は四平街の町角にたらずんでいた。道行く満州人の服装から履く靴に至るまで昨日と変わって新しくなり、歩く姿まで活気に満ちている姿を見入ると、首すじより冷たい汗が流れ落ちた。それは昭和二十年八月十六日の朝六時ごろであった。

それから間もなく四平街の国民学校に集結して、今後の行動について策を練っているうちに、ソ連軍が進駐し、武器は取り上げられた。丸裸同然の姿で無蓋車に乗せられ、アンペラで寒さを凌ぎ、持ち合わせた米とか大豆、乾パンをかじりながら、貨車は北へ進んだのである。

先き行真っ暗な状態の中で、貨車は山坂にさしかかると、速度は急に落ちて今にもとまるようになる。そのと

きに限って、銃声と悲鳴の叫びが聞こえる。逃亡を企てたのだから。

ソ連領へ

うつろな眼をようやく見開き、お腹をおさえながら黒河にたどりついたのは夕方であった。床のない家の土間で一夜を明かした。早朝、身の回りのものをぶらさげてアムール河渡河行軍が始まった。河には船を並べ、船と船の間は細い板でつながれているのである。黒い水の面には凍った氷もまじって流れている。足をすべらせて姿が見えなくなった友。船の中からソ連兵が急に荷物をひたたくる状態で、俗にいう命からがらの渡河であった。

ソ連領（ブラゴエシチエンスク）に足を踏み入れ、高い丘に集結したのは夕暮れとなった。十月の末なのですでに粉雪が降り積もっていた。友の背を合わせて、持っているもの全部をかむり、凍土の上での野宿であった。夜が明けると、裸にされての身体検査、夜の寒さにさらに追い打ちをかけるようなことで、心の中まで冷えきり、自分自身の存在すらおぼろげになったのである。

貨車での輸送

鉄格子入りの貨車の中で、ようやく身体を休めることができると思っていたが、次に我々に襲いかかってくるものは『けだるさ』と『体のむくみ』である。貨車は野原の中に急に停車する。早速用便のため下車。貨車の周囲は友のかがんでいる姿で埋もれる。至るところで血便の水たまりであった。鉄格子の間から見える鉄道のキロ程標識の数字はだんだん少なくなっていく。シベリアの奥地に進んでいることに気づく。

車内での話し声もなくなっていく。チタ附近で貨車は急に停車した。見渡す限り野は銀世界である。それは貨車の片隅で息を引き取った友の埋葬のためであった。夜の明けるのを待って、マンドリンに追いつてられ、五人一組、スコップ二丁での埋葬のための穴掘りである。雪をかきのけると、黒光りする凍土がのぞいている。スコップをあてれば『キーン』という音が返ってくる。しかたがないので一人交替で体で暖めて削るように土をはいて、ようやく夕方までに体が半分ぐらいかくれる深さになった。

身にまとっているものは取り上げられ、友は裸同然の姿で雪で埋葬したのである。悲痛な別れを告げ、再び貨車にゆられて着いたのはウランウデの郊外であった。

凍てつく

厳寒零下三十度の凍原には、氷片の粉が舞っている。そして地下二メートル余り凍っている。その地下に水道管を敷設するとなると、年中凍らないところまで掘り上げていく工事が必要で、しかも厳冬の旺季に限る。早速この工事に取りかからされた。

栄養失調の体ではとても耐えられそうもない。つるはしを十回ぐらい打ちこんで、ようやく握りこぶしぐらいの凍土がほそつとはがれる程度で、ノルマ達成どころの話ではない。パンの量も減るし、昼は飯盒の中に四、五粒の大豆が汁の中で泳いでいるぐらいでは、力の出ようがない。

減量……減量の夕食のあとに待っているものは、手袋や服の繕いである。縫ったところがふくれ上がるようになっていても工事は終わらない。ノルマが達成できないのは指導者の責任として、二坪の営倉入りは週二回ぐらい。

一晩中歩きながら眠るのである。

収容所の床に横たわると、お腹の虫が「キュー、キュー、クー、クー」と鳴いてなかなか眠れない。やっと眠気を催すころには「シラミ」と「南京虫」の運動会が始まる。明かりをつけて追うが、とうとう根負けしうとうとする。朝、友を起こす気力さえなくなり、土解けを待たずして永遠の眠りについた友は日増しに……。

バイカル湖より吹き来る嵐もようやくやわらぐと、一番先にノビルが黒土よりのぞく。一本でも腹の足しにと血眼になって探す。岩塩で味つけし、水腹で満腹感を味わい、こんどは道路工事である。この作業も土を掘り、運搬する量でノルマが測定される。ようやく解けた土は、スコップやツルハンに丸くなるようにくつつく。その土を木のこまでつくった一輪車でガタガタと運ぶので、ノルマはとうてい達成できない。

やがて寒さがやってくると、間もなく吹雪となる。ここでまた新しい作業ができる。道路はもちろん、広い広い飛行場までの除雪作業で、心も体も弱ってくる。次に氷点下四十度ぐらいの日が続きだすと、鉄棒とスコップ

をかついで町のトイレの糞尿砕きという作業が待ちかまえている。さらに汚水にいたるまで割ってトラックに積み込み、バイカル湖まで運搬し、捨てるのである。数日も続くと体から出る臭気は何とも言いようのないものとなっていく。

ダモイ

命からがらに、ようやく昭和二十三年の春にたどりついた。収容所全員の持ち物検査が始まった。一人一人の持ち物を全部持って広場に並んで、裸同然となつての検査で、書いたものはもちろん、下敷きに至るまで取り上げられた。そのまま広場で一夜を明かし、夜明けと同時に出発し、シベリア鉄道を東へ、初めて「帰れるんだ」という気持ちがあった。

最終地ナホトカについては五月の中ころであった。下車するやいなや広場に集められ、民主委員に大声でどなりつけられた。「民主化しなければおまえたちは日本に帰さない」と。三昼夜ぶつ通して民主主義の教育を受けた。

最後に赤旗の歌を歌って合格したものから日本の輸送

船に乗ることができた。輸送船の船底に押し込められ、やっと一息ついていると、間もなく周囲がざわめきだした。「民主委員は船底に集まれ」。敵しい声、声が広がっていく。

このごろから船酔いが出かける。高い梯子を上って甲板に出ると、船はゆれ、便所に行くまでに海に何回か飛び込みそうになった。さらに船酔いは強くなって、とうとうデッキにしがみついたの船旅となった。船底での騒ぎは一晚中続いたと聞いた。

シベリア抑留記

和歌山県 中松 利男

抑留前の記

終戦の確認

昭和二十年八月八日、日ソ開戦以来、急遽部隊は、平陽から牡丹江に移動した。ここにおいて、連日連夜、挺身作戦に終始し、壮絶な戦闘が繰り広げられた。

八月十四日、十六時を期して、全軍挺身切り込みの軍命令が下達された。しかし十五時三十分ころになって、横道河子への転進に命令が変更された。

昭和二十年八月十八日午前二時ころ、終戦から三日後になってようやく終戦に関する命令を受領し、終戦が確認された。数日間の武装解除を経て、ソ連側の警護のもとに牡丹江附近の收容所に護送集結された。

作業隊の編成

我々は名簿の上で、将官級、左尉官級、下士官兵に区分され、将官級はいち早くハバロフスクへ空路護送された。

つづいてソ連側は、作業隊の編成にとりかかった。将校一人を長とし、下士官、兵を合わせて千人を単位に隊を編成し、シベリア各地に送られて強制労働を科せられた。将校連中は、将校收容所に一括收容する目的で、千人単位に隊を編成され、将校收容所に送られたのである。ここに收容された我々は、作業の内容によって必要人員を作業隊として編成され、強制労働を科せられたのであった。